

## 奄美調査報告

### 日本統治期台湾に居住経験を持つ奄美出身者とそのことばについて

東京外国語大学国際日本研究センター

研究員 高嶋朋子

#### はじめに

本稿は、「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究」(科学研究費補助金(基盤研究(B))、課題番号 23310176)の一環として行った、日本統治期の台湾に居住経験を持つ奄美出身者を対象とした調査の報告である。

筆者は、周縁として位置づけられてきた「奄美」という地域の出身者のなかで、特に「外地」に居住した経験をもつ者に突きつけられたことばによる紐帯に関心を持ち、今回は台湾に居住経験がある奄美出身者に限定して、関係史料調査及び聞き取り調査を遂行した。

#### 調査概要

##### ・史料調査

2011年度は7月と2月、2012年度は9月と3月に、鹿児島県立図書館、鹿児島県立奄美図書館、奄美市博物館、奄美大島教育会館で史料調査を行った。鹿児島県と大島郡の人口統計書などの基礎資料に加え、奄美市立博物館所蔵の芝田義則史料と奄美大島教育会館所蔵の大島教育会関係の新出史料を確認した。

##### ・聞き取り調査

2011年度は7月と2月、2012年度は9月と3月に、鹿児島市で2名、奄美市で2名、瀬戸内町で4名の合計8名に対して実施した。瀬戸内町のインフォーマント2名は高齢だったため、1度の調査にとどまったが、他の6名には複数回の調査を行い、時間をかけて詳細な話を聴取した。

#### 調査報告

##### ・近代における奄美から台湾への人的移動

近代における奄美群島出身者の「外地」での活動については、例えば、南日本新聞社編『与論島移住史—ユンヌの砂』(南方新社、2005年)に与論島から満洲への移民が取り上げられているが、総体的にみて研究の蓄積は非常に少ない。

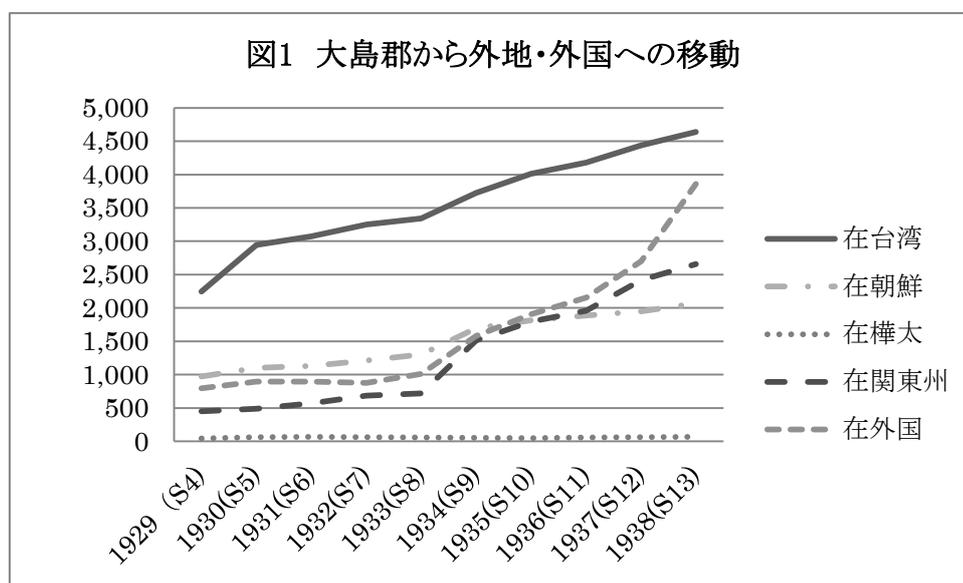
明治から大正期の爆発的人口増加<sup>13</sup>と地域内産業の零細性という問題を抱えた奄美群島

---

<sup>13</sup> 皆村武一『奄美近代経済社会論』(晃洋書房、1988年)によれば、奄美地域は幕末から明治にかけて増えてきた人口が、更に爆発的増加となって大正まで続いた。1824年に80,000人弱だった人口は、1920年には230,000人超まで増えたとされている。なお、この

からは、人口流出が途絶えることはなかった。特に、1920年代からは阪神地方を目指し、工業地帯で就労する男性や紡績女工として働く女性が非常に多かった。現在、奄美群島出身者及び二世・三世らの阪神地域居住者は、200,000～300,000人いるといわれている。そのため、奄美群島からの人的移動をテーマにした研究は、この阪神地域がフィールドの中心である。

しかし、本研究プロジェクト開始前に行った聞き取り予備調査では、奄美から台湾へ移住した人々が多かったという証言を複数得たため、本調査段階で統計資料を確認していった。1895年から日本の統治下におかれた台湾には、1931年時点で250,000人余の日本人が居住していた<sup>14</sup>。在台日本人人口は当初から西日本出身者が多く、『台湾総督府 第三四統計書 昭和五年』（台湾総督府民政部文書課、1332年）によれば、同年に渡台した日本人のうち九州出身者は44.7%に達しており、そのうち鹿児島県出身者は全在台日本人の6%を占めていた。鹿児島県全体からの渡台者は台湾総督府の統計資料から容易に確認できるが、奄美群島が包括されていた当時の行政区分である大島郡から「外地」への人口移動を総じて通時的に把握するデータは不足している。但し、現存する1929～1938年の『大島郡勢要覧』所収データによれば、大島郡から「外地」・外国への移動のなかで、渡台者は最多であり、また年々増大していたことが明白である。



各年『大島郡勢要覧』より作成

郡外に居住した奄美群島出身の同郷者のための月刊誌『奄美大島』の1926年9月号には、各地在住の同郷者数について以下のような記述がみられる。

現象には他地域からの人口流入は無関係で、自然増によるものだった。

<sup>14</sup> 『台湾総督府統計書 第三五統計書 昭和六年』（台湾総督府民政部文書課、1333年）。

(前略) 最近本社が各地在住有志に徴した見込み数の主なものを見ても、大阪府三万、鹿児島県一万三千、兵庫県八千、東京府七千、福岡五千、台湾五千、長崎四千、沖縄二千、朝鮮二千といふ概数を示して居るからである。<sup>15</sup>

『奄美大島』では同郷者が多い大阪、東京などの特輯号が刊行されることがあったが、台湾特輯も2度3号にわたって組まれている。このように、近代の大島郡からは、「内地」においては阪神地域、「外地」においては台湾への人口移動の傾向があったことが窺える。またこうした傾向のなかでも各島ごと（厳密には、各シマ（集落）ごと）に特徴があり、例えば、沖永良部島警察署によって作成された「昭和一六年 管内一般概況情勢」<sup>16</sup>などで確認すると、沖永良部島からは阪神地域に出て行ったケースが多く、台湾行きは非常に少なかったようだ。対して、奄美大島南部及び加計呂麻島出身の渡台者は多く<sup>17</sup>、本調査で行った聞き取り調査の対象は、当該地域出身者が中心となった。

奄美から台湾への人的移動に関する調査成果は、「大島農学校をめぐる人的移動についての試考」(『日本語・日本学研究』vol.3 東京外国語大学国際日本研究センター 2013年)、「近代における奄美群島からの渡台者について」(『交錯する知 衣装・信仰・女性』思文閣出版 2014年)として発表した。

#### ・台湾居住経験を持つ奄美出身者のことばに関する証言

上記したように、奄美では多くの人々が仕事を求めてシマを離れた経験を持つ。奄美から「内地」へ移住した人々や出稼ぎに出た人々の経験は、「シマグチ（集落のことば）を話したら馬鹿にされる」、「標準語」を話せないと仕事先で困る」といった言説として持ち帰られ、奄美の「標準語」励行に拍車をかけたことが先行研究で明らかにされている<sup>18</sup>。では、「内地」以上に「国語」の推進が焦点化された「外地」に居住した奄美出身者はその「外地」で、また引揚げ後、米軍占領下の奄美や、「内地」の居住地で、どのような言語経験をしたのか。この点を重視しながら聞き取り調査を行った。

インフォーマントは、両親が奄美出身の日本統治期台湾居住経験者8名で、今回は全員が奄美大島または加計呂麻島出身者に限定された。各インフォーマントの性別、生年、渡台の経緯や引揚げ後の居住地といった簡単な概要は、以下の表のとおりである。

<sup>15</sup> 「巻頭語 大阪の同胞」(『縮刷版 奄美大島 上巻』、奄美社、1983年(『奄美大島』九月特輯大阪号 大正一五年九月一日発行)) 92頁。

<sup>16</sup> 鹿児島県警察部情報室「大島熊毛地方各署管内概況」『新居善太郎関係文書』資料番号507、国立国会図書館憲政資料室所蔵、1941年

<sup>17</sup> 与路島からの渡台も多かったという証言がある。

<sup>18</sup> 前田達朗「「経験」としての移民とことば 「奄美人」とシマグチを事例として」(『ことばと社会』12号、2010年)

	性別	生年	出生地	台湾当時の居住地	渡台の経緯	引揚げ先居住地
A	女	1927	サイパン	高雄	1931年に父が高雄州の郡役所に転職	1946年に引揚げて奄美
B	女	1913	奄美	苗栗	1933年に在台の製糖会社勤務の奄美出身男性と結婚したため	1946年に引揚げて奄美
C	男	1922	奄美	台北	1937年、高等小学校卒業後に台湾の夜間学校に進学	1941年頃に引揚げて福岡
D	女	1932	嘉義	嘉義	湾生 父が農学校教員	1946年に引揚げて鹿児島
E	男	1937	奄美	嘉義	湾生 父が製糖会社勤務	1946年に引揚げて奄美
F	女	1935	台中	台中	湾生 父が警察官	1946年に引揚げて奄美
G	男	1934	新竹	台北	湾生 父が警察官	1946年に引揚げて奄美
H	男	1937	花蓮港	花蓮港	湾生 父が公学校教員	1946年に引揚げて鹿児島

A、D、E、F、G、Hの6名は、台湾で小学校生活を送っており、全員が学校でも家庭でも「標準語」で話していた。この6名のうち、家庭内で両親がシマグチで話しているのを聞いたことがあったのはFだけで、ほとんどがシマグチの存在すら知らなかった。Aは幼稚園から女学校、そして就職後の1946年に引き揚げるまで台湾に居住したが、家庭の都合で数ヶ月だけ、母親の郷里がある奄美大島南部の小学校に通ったことがある。当時を振り返って、同級生のことばが全く理解できずに困惑したと証言している。高等小学校卒業後に台湾で働きながら進学したCは、台湾に行ってからことばで困ることはなかったかとの問いに、「最初のほうはまあそういうあれがあったけど、台湾に行って日本語がちゃんと使えるようになったですよ」と答えており、当時の奄美の言語状況が推察できる。

奄美での「標準語」励行が、厳密にいつからどのように推進されていったかを示す史料はみつかっていない。しかし、1944年に各学校が「標準語」励行の取り組みをまとめて当時の大島教育会に提出した報告書が現存しているほか、先行研究によって、少なくとも加計呂麻島にある複数のシマの小学校で行われた、1935年頃から1949年頃までの「標準語」励行活動が確認されている<sup>19</sup>。E、F、Gの3名が台湾から引揚げて奄美の学校に転校した1946年当時は、「わるいことば」であるシマグチは排斥され、「きれいなことば」である「標準語」が励行される渦中だった。Aは19歳で奄美に引揚げた後、小学校教員になり、「台湾育ちでことばがきれいだったから」児童の「標準語」指導を任されたことがあったという<sup>20</sup>。実際、シマグチを話した児童は教師に叩かれたり、学校で飼っていたヤギの餌を山に取りに行かされたりという罰を与えられていたが、「標準語」しか話せない台湾引揚げ児童はそうした罰を与えられることはなかった。しかし、休み時間や放課後、みんなで遊ぶ時にはシマグチがわからないと仲間に入れてもらえず、「あらくだりやまとっちゅ」と呼ばれて意地悪をされることもあった。また、子供たちが喜んで参加する地域文化行事もシマグ

<sup>19</sup> 『話言葉普及徹底二関スル件』奄美大島教育会所蔵、ハスンゲルン「昭和期の奄美における標準語教育の実態」『平成19年度 加計呂麻方言調査報告書』鹿児島大学

<sup>20</sup> 引揚げ先の鹿児島市内の小学校に転校したHは、「標準語」が上手いことで表彰されたことがある。当時の奄美だけでなく広く鹿児島県下で、「外地」からの引揚げ者のことばがきれいだという言説があり、県の教育雑誌などにもこうした記述がみられる。

チと密接であるため、何が行われているのかよくわからず、シマ育ちの子供たちのようには楽しめなかったという。結果として、「きれいなことば」しか話せない台湾引揚げ児童は、懸命に「わるいことば」であるシマグチを覚えることで、シマの社会に参加していったのである。

このように、本聞き取り調査によって、1930年代ごろから復帰<sup>21</sup>前後までの奄美においては、「国語」や「標準語」ということばによる紐帯が強いられたことだけでなく、当時の地域社会を形成する人々を紐帯したシマグチということばの存在も大きかったということが、浮かび上がってきた。しかし、ふたつのことばによる紐帯が及ぼす影響は必ずしも画一的ではなく、各人の来歴や立場によって、または時々の場合によって異なった。例えば、シマでは「きれいなことば」と受け取られた台湾引揚げ児童の「標準語」は、決して「正しい標準語じゃなかった」とGは語った。Gが台北で小学生だった頃、東京から来た転校生が「ラジオから聞こえてくるようなことば」を話すため、みんなで笑ってばかりにしたことがあった。「それはつまり、自分達が話していたことばはラジオから流れてくるような正しい標準語じゃなかったんですよ。台湾で特定の地域の方言を聞いたことがあるかというところ、そういうおぼえはないんだが、標準語みたいなことばだけど標準語じゃないことばをみんなしゃべってたですね」と証言した<sup>22</sup>。Fは、シマグチを理解できるようになっても、複雑な敬語については習得できず、年長者と話す際の受け答えは標準語だけだったと述べた。こうしたF同様の証言をしたEは更に、「日本語も中途半端、シマグチも中途半端だから自分が何語を話しているのか。よく考えたら何語でもなくてなんだかいろんなことばの寄せ集めなんでしょうね」と語っていた。こうした証言からは、ことばによる紐帯が幾重にも重なって存在していることがみえてくる。GやF、Eの証言からみえる言語観について、もう一步踏み込んだ聞き取り調査を遂行する機会を得たい。

また、本調査を発展的に継続させる意味では、1950～70年代における奄美の「標準語」励行についても明らかにしていく必要がある。奄美の高校を卒業したF、Gは、その後教員になった。彼らが教職に就いたのは、復帰してすぐの頃になるが、復帰後というのは「標準語」励行が改めて盛んになった時期である。米軍占領下では、奄美群島居住者のなかだけで教員を供給してきたが、復帰後に鹿児島県下の他地域から奄美に教員が赴任するようになると、改めて「標準語」励行という名のシマグチ排斥が激しくなった。自身が児童や生徒だった頃、「標準語」が励行されるなかを逆行するようにシマグチを習得した彼らが、後に教員としてシマグチを排斥する一端を担ったという点に着目する意義は大きい。

---

<sup>21</sup> 1945年9月2日以来米軍政下に置かれていた奄美群島は、1953年12月24日に日米間の復帰協定が調印され、翌25日に日本へ「復帰」した。

<sup>22</sup> 既に述べた通り、当時の在日日本人には九州出身者が多く、台湾で話されていた「国語」に九州方言の影響が大きかったことが先行研究で指摘されている。(例えば、簡月真著・真田信治監修『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』(明治書院、2011年)など)